

# 第17回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



一般の部 優秀賞 受賞作品

『バラを生かす、カスミソウ』

愛知県

三住 友浩

バラを生かす、カスミソウ

三任 友浩（さんずみ とむひろ）

舞台は三者懇談会。まだ中学生の私に対する大人同士のリアルな評価会議。担任の先生が私の総評を母に語る。言葉を選びながら、遠回りに誤解を与えないように説明する先生の姿は、授業では見られないほど低姿勢だ。要するに積極的には前に出るような子ではないが、縁の下の力持ちのような存在です、と言っている。母はとてもポジティブな人だ。その話を聞いて、少なくとも中学生の私は褒められているとは思わなかったが、母は目を光らせ、次のように答えた。

「先生、私もそう思います。この子は目立つような子ではありません。例えるなら、バラではありませんが、それを生かすカスミソウのような役割がぴったりだと思っんです」

私は花に例えられた自分が何とも小っ恥ずかしくなり、下を向いて黙り込んだ。そして、自分が目立てるタイプではないことを母からも認められた気持ちになり、少しばかり諦めた気持ちに似た納得感を覚えた。帰り道に周囲を気にして母に話しかける。

「カスミソウってどんなやつ？」

「白色のお花よ。バラとかと一緒に花束にすると綺麗なの」

「花なの？草じゃなくて？」

母が笑いながら違うことを教えてくれる。

夕暮れの道で止まり、母は少しだけ真剣な表情で私を見た。とても温かい表情だった。

「母さん、カスミソウ大好きだよ。バラが綺麗になるのはカスミソウが引き立てるから。周囲を幸せにすることができると、輝かせることができるのはあなたの強みよ。誰でもできるとじゃない」

見慣れた街から少し田舎に入る田んぼ道。私の記憶が無駄にドラマチックにその言葉を捉えてしまったことに、母には敵わないと思いつらされる。

私は自分の立場に少し誇りを持てるようになった。決して目立つような存在ではなかったが、クラスやチームが良い方向へ進むように陰ながら動き、全体を俯瞰するようなことにやりがいを感じるようになった。

大学生になった私は、一人暮らしを始めた。一人になったときに、時折考えるテーマがあった。自分だってバラになることはできるのではないだろうか。自分が前に出て何かをした方が上手くいくこともあるのではないか。私は人生で初めて、自分がリーダーの立場でみんなをまとめてみたいと思い、サークルを立ち上げた。

最初は小さなサークルだった。友人に声をかけ、仲良しメンバーだけではじまった。数ヶ月もしないうちにメンバーは百人近くまで増えるようになった。そのリーダーとして私は、全員に満足してもらうために奮闘した。以前のような自信のない自分はどこかへ置き去り、自分の求めるリーダー像に自身を当てはめる。

後輩や同級生からも慕われる実感を持った私は、どう見てもバラとしてしばらくの時間を過ごすことになる。カスミソウだった私は、真っ赤なバラへと咲き変わったのだった。

私は自分の変化に全ては気付けなかった。以前のような周りを引き立てるような存在ではなく、いかに自分が活躍し賞賛されるか、だけを考えるようになっていた。これまで自立つことのなかった私の承認欲求が剥き出しになり、それが原動力となっていた。いつの間にか、自分が正しいと考え、それを周囲が賛同することがベストだとさえ思っていた。そのやり方に歪みは少しずつできていたことにも気付かなかった。

「このサークルはもうお前のものだから好きにしたらいい」

副リーダーとして支えてくれたメンパーで、一番頼っていた同級生がサークルを辞めると申し出た。共にサークルを立ち上げた初期メンパーである。

「どうして？ 一緒に作ったからには最後までやり遂げてくれよ」

「お前がいれば別に何とでもなる。俺は必要ない」

私は周りで私を支えてくれていた人たちの気持ちにさえ気づけなくなっていた。

そんな出来事の最中、就職活動が始まった。大学時代は、数多くの経験を積み自信を持っていた。周囲からも期待を寄せられていたのを感じた。

東の間の帰省をするタイミングで母に就職活動のことを報告をした。

「誰もが知るような企業に入って、そこでも活躍したい。海外にも行って成功をしたい」

「それもいいかもしれないけど、もっとあなたの強みが活かせる仕事にしたら？」

「強みって？」

「母さんは大学に行つてからのあなたをあまり知れてないかもしれないけど、誰かのために一生懸命になれるところは人一倍強い子だと思ってるよ」

違和感を覚えた。今、誰かのために頑張ることはできているだろうか？

むしろ誰かを自分のために頑張らせようとしている自分がいるのではないか？ 私はその言葉を聞き、母と顔を合わせられなくなった。

何かを察したかのように母は言葉をかけてくれた。

「あなたはバラを生かす、カスミノウ。それを忘れずにあなたのやりたいことをやりなさい。何年振りに聞いただろう、その言葉。その言葉を今の私の周りで聞いて信じる人なんて誰もいない。私はもう一度自分自身の幸せと強みについて考え始めた。」

「あなたを言葉で表現すると？」

「バラを生かす、カスミノウ」

就職活動のイントロシートに対する回答だ。面接では不思議そうに面接官から質問が飛び交う。

「これはどう言う意味ですか？」

「私は、誰かを輝かせたり、誰かの幸せに対して人一倍貢献したい気持ちがあります。そして、その人を輝かせることにやりがいを感じる事ができる」と言う意味を込めました」

「これはあなたが考えた言葉ですか？」

「いえ、母からもらった言葉です」

「素敵なお母様ですね」

「はい、自慢の母です。この言葉は私の座右の銘になっています」

私は母の言葉を胸に教育への道へと突き進むことになった。目の前の人の幸せが私の幸

せだと思い出したカスミノソウは今もこの言葉を大切にしている。